俳句同好会

代表世話人　小野　野一
世話人　山科　爽風

社団法人京都電業協会の俳句同好会も回を重ねて、第百七十一回を開催する事ができました。
現在会員九名で句座、吟行を開催しています。平成二十二年六月の句会より、㈱日本電気の松井章さんに入会して頂き、楽しい吟行と句座になりました。
初心者を含め入会をお待ちしています。

平成２２年１０月６日　西本願寺にて

第百六十八回　平成二十二年一月二十八日（木）

兼題『年末・年始の事象全般』
句座「喜久屋駒井」東山区宮川筋四丁目

兼題句

健かな日の母浮かび障子はる　爽風
読みさしの清張二冊年暮るる　寿々代
掃除にげ役満を打ち師走かな　野一
年越しや妻うたた寝の静けさよ　慧泉
誰れかれと話しかけたし初銭湯　尚信
松活けて水引凛と新春を待つ　寿々代
客もなく三日早やばやただの日に　窓外
神酒飲み今年の運は神頼み　みつへ
去年今年同じ流れの橋に立ち　綾南
古き札焚火に投じ初詣　綾南
タコあげに親子の背中夕日さす　みつへ
初日影むらさきにそめ遠比叡　窓外
松過ぎて郵便受も普段なり　慧泉

第百六十九回　平成二十二年六月七日（月）

兼題『眼鏡』『歩み・歩く』『ねこやなぎ』と
当季雑詠
故三井　慧泉さんの追悼句
句座「喜久屋駒井」東山区宮川筋四丁目

兼題句

百年の酒蔵裏の猫柳　紫峰
湯女がゆく峡の細道ねこやなぎ　窓外
春雨が降る降らないの祇園道　尚信
春惜しむ句友（とも）の歩まん黄泉路（よみじ）とは　窓外
病癒えそぞろ歩きや風光る　綾南
葱を引く丸い背中に歩み見る　爽風
愛の手をつないで歩く春薄暮（はくぼ）　みつへ
朧月水面に揺れる眼鏡橋　巽
籠一杯ワラビゼンマイスカンポウ　爽風
眼鏡かけ新聞広げ春さがす　みつへ
春告げるイカナゴ漁に湧く港　寿々代
猫柳ふくらみ見せて雨上る　寿々代
たわむれて眼鏡に濡れる汐干狩り　野一

第百七十回　平成二十二年十月六日（水）

兼題　『麦とろ』『椋鳥（むくどり）』『柿』『落花生』
吟行　「西本願寺」
句座　「たん熊」京都東急ホテル　地下一階

兼題句

御影堂大屋根上に秋の雲　綾南
酒肴尽き最後のたよりは落花生　爽風
一人碁を打ってつまむ落花生　綾南
椋鳥に空おおわれて半曇り　野一
献立は麦とろだけの一人膳　寿々代
柿畑もぎたて口に園児の笑顔　寿々代
紅白の仲睦まじく彼岸花　紫峰
初に訪う七堂伽藍大銀杏　窓外
本願寺古木の下の彼岸花　綾南
ポケットに一粒残した落花生　寿々代
椋鳥の二匹あふれて引込線　窓外
渋柿よ軒に吊るされ季の味に　野一
落ちそうに掛軸の柿熟れており　爽風
ピーナツで中国攻めろと怪気炎　窓外
麦とろ食べてごしなれふるさとで　佐伯
鮮やかな柿の一葉石の上　紫峰
風音にせかされしまう破れすだれ　尚信
あかりつき麦とろありの字がさそう　尚信

第百七十一回　平成二十二年十一月三十日（火）

兼題　『紅葉』『顔見世』『愚痴』『独り旅』
吟行　「瑠璃光院」洛北 八瀬
句座　「入舟」京都ホテルオークラ　六階

兼題句

妻不在愚痴のはけ口燗ざまし　窓外
染めあげし八瀬の古刹と霊峰と　窓外
ちり残る照葉一葉辻の寺　尚信
せがまれて芸妓連れて顔見世や　佐伯
独り旅寂しさ癒す栗拾う　みつへ
免許証返すか八十路秋の暮　綾南
年毎に愚痴多くなり秋寒し　寿々代
妻の顔氷のごとく愚痴言えず　野一
散り初め残り色見る紅葉かな　野一
秋野菜高き値札に妻の愚痴　綾南
吹き溜り枯葉のブーケ出来上り　みつへ
愚痴こぼす相手もなくて一人鍋　爽風
紅天使苔絨緞に舞降りる　紫峰
顔見世や街いろめきて急ぎ足　寿々代
妻留守で秋の夜長の独り酒　爽風
ちるもみじ鐘楼やねを赤くそめ　佐伯
顔見世のまねきかすむにしん蕎麦　尚信
名月に負けじと紅葉艶競う　紫峰

追記
メンバーも増え、大変楽しい同好会になって来ました。頭の体操にも、もってこいです。
会員の皆さんのご参加をお待ちしております。
山科　爽風

俳句同好会参加者

正会員
㈱オリヂナル電設　石崎　一郎（陵南）
三和電気工業㈱　小野　俊一（野一）
東邦電気産業㈱　佐伯　希彦
日本システム工業㈱　三井喜代治（慧泉）
平成二十二年四月四日　御逝去
㈱日本電気　松井　章（紫峰）
宮本電気工事㈱　宮本　みつへ
山科電気工事㈱　山科　隆雄（爽風）

特別参加
川鉄電設㈱　下里　尚信
三木　一義（窓外）
三木　寿々代

平成二十三年一月
協会広報誌　第五十一号掲載

俳句同好会

代表世話人　小野 野一
世話人　山科 爽風

社団法人京都電業協会の俳句同好会も回を重ねて、第百七十五回を開催する事ができました。
現在会員九名で句座、吟行を開催しています。
初心者を含め入会をお待ちしています。

平成２３年９月２２日
平安神宮にて

第百七十二回　平成二十三年一月二十七日（木）

兼題　『忘年会』『松の内』『お年玉』『初夢』と
当季雑詠
句座　「京新山」東山区新橋縄手西入ル

兼題句

銭湯で初夢かたる八十路翁（やそじおう）　尚信
音信のなき友よりの年賀状　綾南
役すみて鏡開きし善哉に　野一
柚子風呂で手足を伸ばし皺のばし　爽風
除夜の鐘睡魔さそう一〇八　みつへ
初夢の浅い記憶に満足し　寿々代
漂（ただよ）える病葉（わくらば）かえるとこもなく　窓外
松の内心おきなく朝寝ぼう　野一
お年玉孫の数ほど袋づめ　みつへ
朝氷押しても割れぬ厚さかな　紫峰
松の内手ぬきですごす老二人　寿々代
うちのとは全く違う山の神　紫峰
元気なく一軒で終わる忘年会　爽風
初夢や弁財天と船の旅　綾南
若返えり濃いめの口紅（べに）も松の内　窓外
一本の釘打つ音や年の暮　尚信

第百七十三回　平成二十三年二月二日（水）

兼題　『伊勢参』『春の宮』『剪定』『お水取り』と
当季雑詠
吟行　「梅宮大社」
句座　「京料理 天喜」上京区千本通今出川上ル

兼題句

耐えに耐え開花きし梅の愛おしき　紫峰
お水取り越える日々をば指で追い　尚信
火の舞に連行（れんぎょう）かけるお水取り　寿々代
七重八重（ななえやへ）紅白淡紅梅社　窓外
土手道に梅花漂う澄みし朝　野一
高枝の剪定口から薄陽さす　尚信
雨上り香りただよう梅の宮　寿々代
青空に一直線に紅白梅　綾南
剪定持ち眺めて終る狭き庭　寿々代
剪定も我が家の庭は枯山水　窓外
剪定の鋏のリズム春をつげ　綾南
玉砂利の音進みゆく伊勢参り　爽風

第百七十四回　平成二十三年九月二十二日（木）

兼題　『夜長』『すすき』『秋刀魚』『撫子』と
　当季雑詠
吟行　「平安神宮　神苑」
句座　「あきしの」京都ホテルオークラ　地下二階

兼題句

飛石にすいれんまたぐ散策や　みつへ
十壱輪（といちりん）大和撫子見事に咲き　紫峰
黒雲が伸びて鳴きやむ法師ぜみ　尚信
秋刀魚焼く妻の白髪の増し（ふえ）かな　綾南
夏忍ぶ残り睡蓮風水面　紫峰
セミしぐれお寺の鐘もかき消され　みつへ
我が思い矢作すすきが天を衝く　尚信
撫子や風にゆられ大地の娘　野一
残すなとこっちを見ている秋刀魚の目　爽風
嫁ぐ孫に思いはつきぬ夜長かな　寿々代
摩周湖続けて芒行く道に　野一
長き夜は旨きワインと文庫本　爽風
司馬遼を一巻あげて夜の長き　窓外
人並に幸せ味わう塩さんま　寿々代
ススキの穂ねこがじゃれつく昼さがり　佐伯
撫子の野辺にたたずみ石地蔵　綾南
海戻り九十九里浜初さんま　窓外

第百七十五回　平成二十三年十一月三十日（水）

兼題　『晩秋』『時雨』『都鳥』『紅葉狩』と
　当季雑詠
吟行　「二条城」
句座　「ほり川」京都国際ホテル　一階

兼題句

時雨れても時雨れてもなお鍬を振る　爽風
待つ人のまだ顔見せづ夕時雨　寿々代
なみなみとつがれし熱燗秋夜長　みつへ
日照雨（そばえ）きてちる人波や紅葉狩　尚信
旅人も北山仰ぐ初しぐれ　尚信
日が暮れておこたこいしく猫をだく　みつへ
武士の姿浮かべし秋日和　紫峰
大手門渡り櫓を時雨さる　窓外
鴨川にパン屑に舞う都鳥　野一
たどりつく長命無欲秋の暮　綾南
晩秋にながくかげひく彦根城　佐伯
初時雨丸・竹・夷を駈けぬけり　窓外
愛宕さん見れば晴れ間か止む時雨　野一
ようやくに木々色染めて大手門　寿々代
二ノ丸に大奥みたり深む秋　窓外
阿弥陀堂飾るが如く紅葉燃ゆ　綾南

追記

吟行や句会でいつも感心させられるのは、皆さんの勉強熱心な姿。小野さんに誘われ、俳句というものを分からぬままに参加した私ですが、三年程たって少しずつ面白くなってきました。
句にはその作者の人柄がにじみ出るようです。この頃ではこの句は誰のだと予想がつくようになって来ました。

皆さんも　頭の体操　しませんか(季語なし)

山科　爽風

俳句同好会参加者

正会員

㈱オリヂナル電設　石崎　一郎（陵南）
三和電気工業㈱　小野　俊一（野一）
東邦電気産業㈱　佐伯　希彦
㈱日本電気　松井　章（紫峰）
宮本電気工事㈱　宮本　みつへ
山科電気工事㈱　山科　隆雄（爽風）

特別参加

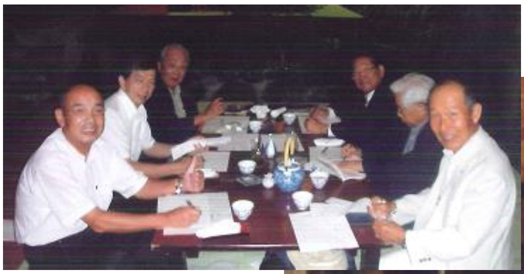
川鉄電設㈱　下里　尚信
三木　一義（窓外）
三木　寿々代

平成二十四年一月
協会広報誌　第五十三号掲載

俳句同好会

代表世話人　小野　野一
世話人　山科　爽風

社団法人京都電業協会の俳句同好会も回を重ねて、第百七十八回を開催する事ができました。
現在会員九名で句座、吟行を開催しています。
初心者を含め入会をお待ちしています。



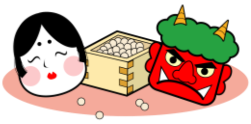
（第 178 回例会）

第百七十六回　平成二十四年二月一日（水）

兼題　『千両』『羽子板』『うらじろ』『黒豆』『おに』『大掃除』『張り替え』『初夢』『お重』
句座　「喜久屋 駒井」東山区川端通松原上ル

兼題句

おにさんとたたいて呼ぶは亭主なり　みつへ
満開の千両こぼれ狭き庭　寿々代
豆喰いてさらに手強きうちの鬼　紫峰
張り替えし仏間の障子に初日かな　陵南
たこあげに風はまだかと待つ寒さ　みつへ
坪庭にひそと紅濃き実千両　窓外
張り替えを終わらぬ内に除夜の鐘　紫峰
七草の粥の香りや寝床まで　陵南
初夢やふっと笑いて良き目覚め　野一
うらじろを飾り供えて古社末社　尚信
羽子板の高き音にふと足を止め　爽風
年毎に手ぬきのふえる大掃除　寿々代
破れ凧や舌出す鬼がざんげする　尚信
一本の古釘入りて黒豆（まめ）の艶　爽風
松過ぎて元の二人の箸をだし　陵南
初夢をなにやらみたりわすれたり　窓外
節分にオニの詫びてる泣きし子に　野一
お重箱親しい人から届けられ　佐伯



第百七十七回　平成二十四年四月十日（火）

兼題　『夜桜』『山葵』『桜餅』『都踊』『朧月』『かがり火』
吟行　「下鴨神社」
句座　「あきしの」京都ホテルオークラ 地下二階

兼題句

ヨーイヤサ都をどり人集め　佐伯
我が孫や葉までいただく桜餅　野一
香り立つ薄紅色の桜餅　みつへ
桜餅くち僉議（せんぎ）する老舗かな　尚信

浅漬のわさび葉も添え一人酒　寿々代
夜桜のまてぬ季節の先を取る　尚信
湧水の尽きることなし花山葵　窓外
篝火に燃やして散るる潔よさ　紫峰
かがり火や早く咲けよと燃えあがり　佐伯
桜餅包む葉の香をにぎりしめ　寿々代
神苑のさざれの石や春の風　陵南
一会（いちえ）かな糺の森の桜（はな）と風　窓外
きよみずに花弁を浮かべし山葵田　紫峰
おぼろ月老いた母の手にぎりしめ　みつへ
闇深くかがり火ゆれて桜（はな）映える　寿々代
花篝光芒闇を深くせり　窓外
山葵田の隙間に日射し水光り　野一
春の夜に思い出語るかがり火に　みつへ
かけ茶屋の赤き毛千氈桜餅　陵南

第百七十八回　平成二十四年九月二十日（木）

兼題　『川床』『白露』『枝豆』『秋の夜』
吟行　「貴船神社」
句座　「貴船　喜らく」左京区鞍馬貴船町四十七

兼題句

健診の結果を愁い秋の夜　尚信
草深き路地の地蔵に白露かな　陵南
献燈をのぼればそぞろ秋気あり　窓外
読書経てコーヒー濃い目に秋の夜　陵南
水の香マイナスイオンあおり川床　野一
心放き貴船の床の五七五　爽風
亡き句友偲ばる秋の貴船道　陵南
白露（しろつゆ）とともに寝ざめる旅の朝　尚信
永年の思い水の音貴船川床　尚信
政局はいかにと枝豆追加せり　窓外
十和田湖に白露の月の影を見る　野一
細柱川床ささえ知らぬ顔　佐伯
川床で日頃のうさを流し去り　爽風
大あくび窓に映りし夜長面（づら）　窓外

追記

他の協会には無いと思われる文化の香り高き同好会、それが俳句同好会です。
ずっと以前は毎月のように開催されていた時期も有ったようで、先輩方の熱意には脱帽です。忙しい時代の今は、無理のないように年に3～4回の吟行、或は句座を開催しています。
優しい(?)先輩方が手とり足とり(口とりかな?)教えて下さるので、貴方も気軽に是非ご参加ください。お待ちしています。

代表世話人　小野野一
世話人　山科爽風

俳句同好会参加者

正会員

㈱オリヂナル電設　石崎　一郎（陵南）
三和電気工業㈱　小野　俊一（野一）
東邦電気産業㈱　佐伯　希彦
㈱日本電気　松井　章（紫峰）
宮本電気工事㈱　宮本　みつへ
山科電気工事㈱　山科　隆雄（爽風）

特別参加

川鉄電設㈱　下里　尚信
三木　一義（窓外）
三木　寿々代

平成二十五年一月
協会広報誌　第五十五号掲載